バード ： プレリュード、パヴァーヌ（サー・ウィリアム・ピーター）、ガイヤルド（サー・ウィリアム・ピーター）（「パーセニア」より）

W. Byrd：Prelude, Pavan Sir William Petre,
Galliard Sir William Petre from "Parthenia"

バード ： ファンシー（「ネヴェル夫人の曲集」より）

W. Byrd：A Fancy from "My Ladye Nevells Booke of Virginal Music"

モーツァルト ： 幻想曲とフーガ ハ長調 K. 394

W. A. Mozart：Fantasy and Fugue in C major K. 394

モーツァルト ： ピアノ・ソナタ 第17番 ニ長調 K. 576

W. A. Mozart：Piano Sonata No. 17 in D major K. 576

第 1 楽章 アレグロ　1st mov. Allegro
第 2 楽章 アダージョ　2nd mov. Adagio
第 3 楽章 アレグレット　3rd mov. Allegretto

Intermission

リスト ： ピアノ・ソナタ ロ短調 S. 178/R. 21

F. Liszt：Piano Sonata in B minor S. 178/R. 21

リスト ： 巡礼の年 第3年 S. 163/R. 10より「エステ荘の噴水」

F. Liszt：Annees de Pelerinage Troisieme Annee S. 163/R. 10
"Les Jeux d'eaux a la Villa d'Este"

【 2017年日本公演スケジュール 】

日 時	都道府県	会　場	主　催
1/21(土)	埼 玉	彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール	公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
1/23(月)	東 京	浜離宮朝日ホール	朝日新聞社、ジャパン・アーツ

青澤 隆明 Takaakira Aosawa（音楽評論）

キット・アームストロングという音楽家の「発見」は、多くの人々にとって新鮮な驚きと興奮を呼び覚ますものだろう。まずは、彼自身が数学を含む多方面への関心と才覚のなかから、音楽家としての自分を選んだという第一の発見がある。そして、13歳で出会ったアルフレッド・ブレンデルが彼の才能を発見し、現在までの良き導き手となった。

とにかく不思議な魅力をもった若者だ。静けさと探求の情熱を湛えている。バランスや距離に自覚的で、作品の多様な可能性を細密に見通そうとする姿勢がある。アーリー・ミュージックへの関心も強く、チェンバロも弾き、フォルテピアノの協奏曲も作曲するほか、フランスの教会も手に入れてますます造詣を深めている。昨夏には初めてのオルガン・リサイタルで、バード、リゲティ、フレスコヴァルディ、リストなどをプログラムに組んだ。

音楽の歴史的時空を自在に遊興し、文脈と連繋を探る彼の好奇心は、プログラミングにも色濃く反映されている。今回は、バード、モーツァルト、そしてリストという天才たちの作品を、大きな時空の画布に織りなす旅となる。それぞれの時代、奏法、様式観、そして精神性を、知性的な読みで顕かにするとともに、さまざまな鍵盤楽器と響きの空間を通じた探索から育まれてきた音の知覚についても、聴き手に多くの発見を導くものと期待される。

なぜなら、キット・アームストロング自身が広大なレパートリー、そして自己の可能性を鋭敏な知覚で発見し続けているさなかだからだ。17世紀、18、19世紀と、それぞれに時代を拓いた多様な形式の名作の演奏を通じて、音楽の喜びとともに発見の興奮が熱く脈打つことになるだろう。

バード ： プレリュード、パヴァーヌ（サー・ウィリアム・ピーター）、ガイヤルド（サー・ウィリアム・ピーター）（「パーセニア」より）

エリザベス朝最大の作曲家と称えられるウィリアム・バード（1540頃～1623）は、フランドル楽派の模倣ポリフォニー様式を本格的に導入し、合唱、合奏、鍵盤作品などを作曲、楽譜の印刷出版事業も含めて、イギリスの音楽に大いなる貢献をしていった。『パーセニア』はイギリスで初めて印刷された鍵盤楽器の独奏曲集である。1611年に銅版で印刷された28頁の曲集で、1613年には再版されたといわれ、ヴァージナル、ハープシコードなどで演奏された。バードの8曲、ジョン・ブルの7曲、オーランド・ギボンズの6曲を合わせて21曲の編成。うち15曲にパヴァーヌ（2拍子の遅い舞曲）やガイヤルド（3拍子の速く軽快な舞曲）の様式が用いられた。最年長のバードの手による「プレリュード」、「パヴァーナ（パヴァーヌ）サー・ウィリアム・ピーター」、「ガイヤルド」は同曲集の最初の3曲に置かれている。

バード ： ファンシー（「ネヴェル夫人の曲集」より）

ルネサンスの鍵盤音楽の重要な財産である『マイ・レディ・ネヴェルズ・ブック（ネヴェル夫人の曲集）』は、バードが1591年に選曲、編纂、校訂したとされる自作曲集で、「ア・ファンシー」は、全42曲の36曲目に収められている。ファンシーというのは、16世紀イタリアのファンタジアに由来する17世紀イギリスの器楽曲で、もともとは対位法的な書法をとる曲種。本作は、同曲集の目次で「ア・ファンシー ： マイ・レディ・ネヴェルのために」と特に銘打たれている。

モーツァルト ： 幻想曲とフーガ ハ長調 K. 394

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）は、まずチェンバロを弾く神童として名を知られ、当時新興してきたフォルテピアノの名手として多くの傑作を書いた。

ウィーンに出たモーツァルトは1782年春からヴァン・スヴィーテン男爵のサロンに出入りして、バッハ一族やヘンデルの対位法音楽に衝撃を受け、翌年にかけてフーガの作曲を集中的に試みては破棄している。

1782年4月に書かれた「プレリュードとフーガ」K.394には、同じハ長調で始まるバッハの「平均律クラヴィーア曲集第1巻」の第1曲への意識もあったのだろう。プレリュードは「ファンタジー」の名で出版されることも多いように幻想曲ふうの趣で、アダージョ、アンダンテ、ピウ・アダージョ、プリモ・テンポと歩みを変化させる。先に作曲されたというフーガは、アンダンテ・マエストーソの3声フーガ。

モーツァルト ： ピアノ・ソナタ 第17番 ニ長調 K. 576

ニ長調ソナタK.576が書かれた1789年、モーツァルトは経済的にも精神的にも困窮に陥り、作品数も極めて少ない。ベルリンの宮廷に赴いて打開を図るも、皇帝のための6曲の弦楽四重奏曲と皇女のための6曲の「やさしいピアノ・ソナタ」の作曲の仕事を取りつけるにとどまった。ソナタの約束については、モーツァルトは7月に1曲を仕上げただけで、あとは完成を見ずに放置された。

モーツァルトの最後のピアノ・ソナタとなった本曲は、狩のホルンを想わせる冒頭主題の活発さに反して、円熟した内容をもつ名作に仕上げられている。「やさしい」はずのソナタは、技巧的にも格別に難しい作品となった。アレグロ（ニ長調、8分の6拍子）、アダージョ（イ長調、4分の3拍子）、アレグレット（ニ長調、4分の2拍子）の3楽章構成。

リスト ： ピアノ・ソナタ ロ短調 S. 178/R. 21

フランツ・リスト（1811～1886）はハンガリー生まれのドイツの音楽家で、サリエリに作曲を、チェルニーにピアノを学び、パガニーニに憧れて大ヴィルトゥオーゾとして名を成した。

リストの唯一のピアノ・ソナタは、1852年から翌年にかけて作曲された。さまざまな角度で表現方法の刷新を行ってきたリストが、伝統的なソナタの様式を新しく捉え直し、ロマン主義的な表現を大胆に探求した意欲作である。シューマンに献呈されたロ短調ソナタは単一楽章のうちに、提示部、展開部、再現部で構成されるソナタ形式と、急－緩－急の多楽章形式が構造的に融合されている。曲の冒頭で提示される複数の動機の変容から全体を緻密に構築するなど、有機的な設計から劇的な音楽が導かれる。

曲はレント・アッサイの*pp*で始まり、アレグロ・エネルジコ、グランディオーソ、アンダンテ・ソステヌート、クアジ・アダージョ、アレグロ・エネルジコ、ピウ・モッソ、ストレッタ・クアジ・プレスト、プレスティッシモと波乱万丈の激動を経て、アンダンテ・ソステヌート、アレグロ・モデラート、レント・アッサイとなり*ppp*で鎮静する。

リスト ： 巡礼の年 第3年 S. 163/R. 10より「エステ荘の噴水」

1610年代の作品を訪ねて始まったキット・アームストロングとの音楽の旅は、1870年代後半、リスト晩年作から次代を予見するようにしめくくられる。

リストは多様な詩想にもとづいて、数多のピアノ曲を創造していく。20代のリストの若き情熱は、6つ年上の伯爵夫人に向かった。1835年にゴシップ渦巻くパリを離れると、スイスで落ちあい、1837年からはイタリアへ向かった。二人の愛の逃避行は、『巡礼の年』の連作に反映され、『第1年〈スイス〉』、『第2年〈イタリア〉』、『第2年 補遺〈ヴェネツィアとナポリ〉』がまとめられた。前集までと異なり、地名を題さない『巡礼の年第3年』の7曲は、1867年から1877年にかけて書かれ、1883年に出版された。内省を深めるリスト晩年の様式で、宗教曲と悲歌ふうの曲で構成されている。第4曲「エステ荘の噴水」は1877年に書かれ、曲の半ばにはヨハネ福音書からの引用「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（新共同訳）が記されている。ドビュッシーやラヴェルを先取りする革新的な和声と分散の運動感は、まさに偉才が掲げた水の暗喩にふさわしい。